常太郎(じょうたろう)のママはピアニストだ。時々、市民楽団の演奏会に駆り出されてピアノを弾いている。しかし、あまり収入にはならないのでパン屋でバイトをしている、といった具合だ。

パパはママよりずいぶん年上で、会社を経営しているが、さほど商売の才覚はなく、したがって、しみったれた状態がずっと続いているという台所事情だ。

でも、ママは見栄っ張りなので、そんなことはおくびにも出さない。

ママの見栄っ張りは今に始まったことではない。

子供の頃からそうで、さらに突き詰めて言うと、ママのお祖母さんもそうで、そのお祖母さんのお母さんもそうで、つまり筋金入りの血筋なのだ。

ちょっと間(あいだ)が飛んでしまったが、ママのお父さんは男なのでそんなことはない。

どうも男性には遺伝しないらしい。

ということは、常太郎は男なのでそうではないということになる。

などと、僕はさっきからどうでもいいようなことを言って

いる。

前置きが長くなったが、僕の名はサダハル。

常太郎のママが嫁いでいる家の長男であるパパのお父さんの家に寄宿している猫だ、毛並みは黒い。

だけど、断わっておくが、決して腹黒いわけではない。

なんだって？じゅうぶん腹黒いだろうって？

そういう意見も無いことはない。

さて、今日はママが所属している楽団の、バイオリン弾きの女の子が、家に遊びに来るというので、ママは朝から掃除をしたり、食事の準備をしたりとあれこれ忙しい。

しかし、そういう時のママはいつものように口やかましかったり、目を吊り上げて常太郎を怒鳴ったりはしていない。

粛々と無表情で仕事をこなして行く。パン屋のレジと同じだ。

そう、つまり同じなのだ。

こんな無愛想な女性が何故(なぜ)人気があるのか、僕にはまったく不可解だ。

今日のメニューは、たまねぎとにんじん、それと少量のキャベツを小さく刻んで、パセリのみじん切りを浮かべたコンソメスープと、フランスパンのスライスを焼いてガーリックバターを塗ったもの。

ちなみに、僕はこのガーリックバターが苦手で、普通のバターでいいじゃないかと思う。でもママに言わせると、これがなんともいえず良いのだそうだ。

ママが若い頃に、今でもじゅうぶん若いんだけれども、何度か行ったイタリアででも覚えたのかもしれない。

本当はそのまま留学したかったらしいのだけれど、なかなか親の経済状態もあるので、そうはいかなかったらしい。

僕が、らしい、らしいと連発するのは、おおむねこういったことは常太郎からの情報で、僕が見たようなことを言うのもそういったことなのだ。

それから、牛のもも肉のたたきをスライスしたものに、青じその絞り汁を入れて、やや甘めに味付けしたドレッシングをかけて食べるというものに、メインはスパゲッティナポリタンだ。

これは、外国人、特にイタリア人には評判が悪いらしいが、ママの作るナポリタンはまた別物だという話だ。

なにしろ、ママのナポリタンは麺を茹で置きしないといったもので、アルデンテで湯気の立っているものに、トマトケチャップとオリーブオイルで作った特製のソースをからめて食べる。

これがまた格別に美味いらしい。

茹で置きしないナポリタンなんて、ナポリタンと呼べるのか？とか、甘ったるいトマトケチャップで作ったスパゲッティなんて邪道だ、とあちこちから批判がでそうだが、美味いものはしかたがない、らしい…。

まあ、これも常太郎の意見で、僕としてはどっちにしろ甘い物は嫌いなのできっと嫌いだろうと思う。

常太郎一家が住んでいるマンションはあまり広くはない。六畳程度の部屋と、テーブルがなんとか置ける程度のキッチン付の部屋がひとつあるだけの、いわゆる２DKというやつだ。

それでも都会では、けっこう家賃が高い。

ママが料理を作っている間、常太郎は隣の部屋で胡坐(あぐら)をかいた格好で、玩具(おもちゃ)のピアノを弾いている。

うつむき加減で弾いている姿は、和製シュレーダーといったところだ。

なかなかテンポよく弾いているが、しかしこのピアノには黒鍵がない。つまり半音階がだせないのだ。しかたがないので、隣の音も同時に弾いているのだが、それで半音が出せているのかいないのかはよくわからない。

そうこうしているうちに玄関のチャイムが鳴った。

ママは、思わずキッチン横の壁掛け時計を振り返って、あら、もうこんな時間かしら、といった表情を浮かべ、テーブルを拭いていた手を止めた。

「あら、いらっしゃい」

ママが玄関のドアを開けると、女の子がはにかむようにうつむき気味に立っていた。

「さあどうぞ入って、狭い家だけど」

ママは愛想笑いを浮かべると、女の子を家の中に誘った。

しかし、ママほど愛想笑いの下手くそな女性もめずらしい。精一杯やってこの程度だ。いかに自信満々な人生を送ってきたのか、想像するのにむつかしくない。

かといって、そんなに悪い人間ではない。

…どうも僕のママに対する評価は辛(から)いようだ。

女の子は玄関先で靴を脱ぐと、上がりかまちで膝をついて丁寧に靴を揃え直した。なかなか品の良さそうな女の子だ。

女の子と言っても、もう二十(はたち)歳になる音楽大学に通っている女性なのだが、その面立(おもだ)ちはみょうにあどけない。

「ごめんなさい、今から用意するからちょっと待っててね」

「あ、そこのソファーにでも座ってて」

ママは、食器棚の中から、白い陶器のパン皿を３枚引っ張り出して、テーブルに素早く並べた。

本人は別にいそいでいるわけではないらしいが、性格のせいで動作はいたって手早い。

「あっ、いいですよ、常太郎君と遊んでますから」

彼女は、おとなしい性格だが子供好きな様子で、すぐに常太郎のそばに寄ると、少し膝を折って覗き込むように笑いか

けた。

「こんにちは、常太郎君」

　常太郎はピアノの手を止め、にっこりと笑って彼女を見上げた。こちらはひどく愛想がよくて、筋金入りの愛想笑いだ。

　親子でもおおよそちがって、正反対だ。

「常太郎君ピアノ上手ね、なんて曲？」

「エーデル」

　エーデルワイスの意だが、常太郎は必要以上に喋らない。何でも喋れるのだが、あまりベラベラ喋ると変な奴に思われるからだそうだ。これは僕と常太郎だけの秘密だ。

　ちなみに、このエーデルワイスは、ママが口ずさんでいるのを聴いて覚えたらしい。

「エーデルワイス、素敵ね」

　彼女の笑顔もなかなか上品で可愛らしい、ふだんは泣きべそをかいたような顔をしているのだが。

　ママの準備もととのって、食卓についた３人は、いただきますの挨拶をし、スープをすすって堅焼(かたや)きのフランスパンをかじりはじめた。

常太郎は子供用のハイチェアーに座って、大人顔負けの仕草で、パンをかじっている。

常太郎が大食漢なので、女の子は驚きの表情で常太郎を見つめている。

「ちょっと、びっくりするでしょう。何時(いつ)もこんな調子なのよ」

ママが、女の子の視線に気づいて、気恥ずかしそうに苦笑いをうかべた。

「あ、いえ、男の子はこれくらいが頼もしいですよ」

「うちの弟なんかは大人しくて青白くて、電動自転車で高校に通ってるような子ですから」

「まあ、それは、ちょっと困りものね」

ママはもともとお転婆(てんば)なので、思わずそう言ってしまった。

今度は女の子が、きまり悪そうに伏し目がちに笑った。

ママの所属している楽団は、総勢６人の室内楽団だ。小規模なコンサートを開いて客を呼んでいる。

それでも、このあたりでは多少有名なので、少々の稼ぎにはなっているようだ。

「未来(みらい)ちゃん、次の公演の譜読(ふよ)みはもう終わったの？」

「もう大体は終わりました」

「明奈(あきな)さんは譜読みが早いから、もう大体仕上がってるんでしょう？うらやましいなあ」

　女の子は佐多未来(さたみらい)、明奈はママの名前だ。

「早いだけがとりえなのよね」

「そんなことないですよ。奥村さんが、秋山さんの演奏は最高だって言ってましたよ」

　奥村さんとは楽団の主宰者の名前だ。

「あの人の言うことはあてにならないし、いい加減なのよ」

　ママは眉間にしわを寄せて、あからさまに嫌そうな顔をした。

　どうもこの奥村というのは、ママに色目をつかってるらしい。ママがパパにそうこぼしているのを聞いたそうだ。もちろん常太郎がだ、僕が直接聞いた訳ではない。

「でも、奥村さん第一バイオリンだし、私よりずっと上手いし…」

「そんなこと無いと思うわ。未来ちゃんのバイオリン、私は

好きだわ」

「だいいち、彼は楽をしたいのよ。未来ちゃんに任せて自分は指揮者に専念したいのよ」

「そうなんですか？」

「たぶん…」

　ママは、自信はない表情で口ごもった。

　未来ちゃんは、ママのそんな様子がおかしくて笑いをこらえている。

「でも私、楽団をやめなくちゃいけないかもしれないんです」

　少し間を置いて、未来ちゃんが小さな声で言った。

　ただでさえ大きくない声が、いっそう弱々しく響いて、耳の良いママが、えっ、と聞き直さなければならなかった程だ。

「やめるって、どうして？」

　未来ちゃんは、暫くためらっていた。きっと、今日そんな話をするつもりは無かったのだろう。

「楽団っていうより、大学なんですけど」

「やめて、家に帰らなくちゃいけないんです」

「どうして？」

「父が会社を経営してたんですけど、それが倒産してしまって」

「まあ、それは大変ね」

　ママは、うちの旦那なんか、何時(いつ)会社を潰してもおかしくないのよ、と言いたかったが、そんなことはとても言えないので言葉を切った。

「とても学費は払えないし、父が、私に才能がそんなにある訳でもないので、やめて帰ってきなさいって言うんです」

　未来ちゃんは、今にも泣き出しそうな顔をした。

　もともと泣きべそをかいたようなそんな顔なので、ひどく可愛そうな気がした。

「未来ちゃんのバイオリンの才能は悪くないと思うわ」

「でも、学費は大変ね」

　ママは、自分のそれと彼女を重ね合わせ、彼女の境遇に同情した。ママにしても、決して楽な学生生活ではなかったようだ。

「私、そんなに才能ないですよ」

　どうも、彼女はあまり自信家ではないようだ。

「さあどうかしらね。とにかく、今度の公演は未来ちゃん一人でバイオリンをやらなくちゃいけないんだから」

ママはサバサバした調子で言ってのけ、未来ちゃんは気後れしてうつむいた。

もう少しやさしく言ってやれないのかと、僕は腹立たしく思う。

常太郎は、素知らぬ顔をして食事に没頭している。

どうも、なんでもパワーで抑え込んでしまえばいいだろう、と思う人達の感覚を、僕は理解できない。

「ちょっと、ちょっと、佐多さん、そこが違うんだよな、ワンテンポ遅れてるんだよ。僕がこう指揮棒を振ったら、そこで入ってくれなくちゃ」

奥村はいまいましそうに、指揮棒で譜面を叩きながらぶつぶつ言った。

「秋山さんも、もうちょっとテンポを抑えてもらえないかなあ」

今度はママの方を振り返って言ったが、言葉つきはえらく

柔らかい。

「これでも、けっこう抑えてるんですよ。バッハのコンチェルトなんてこんなもんじゃないんですか？」

「そりゃ、秋山さんがバッハを全曲やったのは知ってるけど…」

　奥村は、困ったように眉間に皺をよせ、猫なで声で言った。

「奥村さんが第一バイオリンをやって、未来ちゃんを引っ張ってあげたらいいんじゃないですか。だいいち、室内楽で指揮者なんて聞いたことがないですよ、そうでなくてもうちはぎりぎりの人数でやってるんですから」

「いや、僕はこのところ右手の腱鞘炎（けんしょうえん）がひどくて」

　奥村は、いい訳がましくどもりながらママから目を外（そら）せた。

　楽団の構成は、ピアノにバイオリン、ビオラとチェロとコントラバスといったもので、この演目だとピアノではなくてチェンバロが望ましいが、そんな気の利いたものを置いているホールは滅多にない。

　ビオラは年配の女性で、チェロとコントラバスは二人の中年の男性が担当している。

三人は奥村とママのやり取りを、にやにやしながら聞いていた。

奥村は、えへん、えへんと咳払いをすると、するどい視線を三人に投げかけて、勢いよく譜面をめくった。

しかし、譜面は思ったようにめくれず、皺くちゃになりながら、ゆっくりとまたもとの位置におさまったので、三人は、うつむいて笑いを堪(こら)えなければならなかった。

「それでは、もういちど最初から、最初からですよ、いいですか」

奥村は早口でまくしたてると、譜面に目を落として指揮棒を目の前で細かく振った。

朝早く寮を出ると、未来ちゃんは、すぐに隣のレッスン室のある建物に向った。

寮は最近越してきたばかりで、少し前までは学生用のマンションに住んでいた。

家賃が高いので引っ越すことになったのだが、最近は、寮を利用する学生も少なく、二人用の部屋を一人で使うことに

なった。

　その方が気楽に使えるので有難かったが、最初は、寮での勝手がわからず戸惑ったりもした。

　レッスン室のある建物の入り口を入って行くと、すぐ横に守衛室があって、そこで部屋の指定をして、空いていればそこを使うことができた。

　未来ちゃんにはお気に入りの部屋があって、大きな楓の木が窓の外にあって、この季節には青々とした葉を茂らせている。

　守衛室には、白髪頭の髪の毛をていねいに撫でつけた小柄なおじさんが居て、おじさんは、未来ちゃんを見ると、空いてるよと言って鍵を渡してくれた。

　未来ちゃんは、三階の階段を上って、東寄りの中ほどの部屋のドアを開けた。ドアは鉄製で、クリーム色のペンキが剥げたところを何度も塗り直していて、ちょっと古めかしい感じがした。

　中に入ると、南側に一間（いっけん）ほどの窓があり、アルミのサッシがはめ込まれていた。壁には吸音パネルが張ってあったが、

窓ガラスは一枚で、すべてが防音という訳ではないようだ。

まあ、なんにしろ音楽大学の敷地内の建物なので、問題はないのだろう。

窓側の近くには、グランドピアノが置いてあって、どこのメーカーのものかは分からないが、ちょっと年季の入ったもののように見えた。

未来ちゃんは、いくつか置いてあるパイプ椅子を広げて、手に提げてきたバイオリンのケースを置き、中からバイオリンを取り出した。

それは、高校時代から使っているもので、特別良いものではないが、悪いものでもない。お父さんが買って来てくれたそこそこのものだ。はいよ、と言って渡されたもので、特別なにかそれにまつわる感動的なストーリーがある訳でもない。

未来ちゃんは、それを手に持つと、ポンポンと指で弾いて音を確かめると、やにわに勢いよく弾き始めた。

なんとなく彼女の印象とはアンバランスで、ちょっと意外だ。

未来ちゃんは、授業で出された宿題の曲や、楽団で弾く曲やらを次々と弾いていった。

わりと力強くて、なかなか迫力はある。ただ少しギコギコと妙な音が混じったりする。

「うるさいなあ、寝られやしないじゃないか」

未来ちゃんは、一瞬なんだろうと思ったけれど、手を休めることなくバイオリンを弾き続けた。

「うるさいっ、て言ってるだろう」

今度は少し大きい声が聞こえてきた。

未来ちゃんは、弾いている手を止めると、窓の外を伺った。

窓の外は、青々とした楓の葉が茂っていて、その向こうに真っ青な空が見えた。ああ、もう夏なんだと未来ちゃんは思った。

「どこを見てるんだ、こっちだ」

声は部屋の中から聞こえてきた。

未来ちゃんが声のする方を見ると、ピアノの横に小さな金髪の男の子が立っていた。外国人の子のようで、いつの間に入ってきたのだろうかと、不思議に思って見ていると。

「お前の音はうるさ過ぎるんだよ」

　男の子は、未来ちゃんをじっと見て横柄な調子で言った。

　未来ちゃんは、はっきりとそんなことを言われたことがなかったので、思わず涙ぐんでしまった。

「案外、弱虫なんだな」

　男の子はたたみかけるように言うと、ふわりとピアノの上に飛び乗って腰をかけた。動きは軽やかで、栄養過多ででぶっているように見える外見からは想像できない。

「あなたは？」

　未来ちゃんは、ようやく気を取り直して男の子に言った。

「僕は、僕だ」

「いつの間に入ってきたの？鍵は掛けてた筈だけど」

　未来ちゃんは首を傾げた。

「それはこっちのセリフだ。せっかくいい気持ちで寝てたのに」

「えっ、そうだったの？気づかなかったわ」

　未来ちゃんは驚いて、男の子をじっと見つめた。

　男の子は、未来ちゃんを見つめ返すと。

「まあいいや、君は誰だい？」

　と、今度は少し丁寧な口調で言った。

「私は佐多未来、ここの学生よ」

「ふうん、なんだか情けなさそうな顔をしてるんだな」

　なんでもずけずけ言う態度に、未来ちゃんは段々腹が立ってきた。

「そんなことを初めて会った人に言われたことはないわ」

「僕は、このピアノだ」

　男の子は、未来ちゃんの様子を気にすることもなく、自分が腰掛けているピアノを、コンコンと叩いた。

　未来ちゃんは、男の子が何を言っているのか意味が分からず、黙って男の子を見ている。

「ピアノというのは正しく無いな。ピアノの精霊というのが正しいだろうな。いやそれもちょっと違うな。正確にはこのピアノが作られた木に宿っていた精霊だ。僕が眠ってる間（あいだ）にいつの間にかピアノになっていた」

　男の子は、ぶつぶつとつぶやくように言った。

　未来ちゃんは、少しあきれて。

「それは、あなたが寝ぼすけなだけじゃないの」

　と、男の子に言った。

「なんだって？放っておいてくれ。君にそんなことを言われる筋合いはない」

　男の子はいきり立った。

「じゃあ、何故（なぜ）私にそんなことを言ったの？」

「別に…、ただずいぶん久しぶりに人と口を利いたもんだからだよ」

「ほらごらんなさい、やっぱり誰かに聞いてもらいたかったんじゃない」

　未来ちゃんは、勝ち誇ったように言った。

「とにかく、君の下手くそなバイオリンの音がうるさいから目が覚めてしまったじゃないか」

「いったい、いつから寝てたの？」

　男の子の精霊は腕組みをして考え込んだ。

「そうだな、よくわからないけど、前はピアノを弾いてた女の子の時だったかな」

「何時（いつ）の話なの？」

「そんなこと僕が知る訳ないだろう、どれだけ寝てたかも分からないんだから」

「どっちにしろ、この場所ではお前さんで二度目だ」

　そう言うと、男の子の精霊はピアノから飛び降りて、未来ちゃんの前に立った。

　近くで見ると、その精霊は、未来ちゃんよりずいぶん背が低いのが分かった。

　精霊は、あらためて未来ちゃんをまじまじと見た。

「それにしても、ひどい音だな」

　未来ちゃんは、また眼頭が熱くなって、泣き出しそうになってしまった。

「そんなに、ひどいかしら？」

「ひどいね。僕がもうまるっきり眠れなくなってしまうぐらいだからな」

　精霊は、両手の甲を左右の腰に当てて、露骨に嫌そうな顔をした。

　未来ちゃんは、もう何も言う勇気がなくなってしまった。

「前のピアノ弾きの女の子なんかは、すごく気持ちのいい音（ね）

色(いろ)で、僕はいつもこのピアノの端っこで寝てたんだ」

「なのに、君のバイオリンときたら、まるで鋸(のこぎり)でブリキの板を挽(ひ)いてるようなもんだ。ちょっと耐えられないな」

精霊はそう言い放った。

精霊は、そう言い放ったが、その後に再び腕組みをして考え込んだ。

「でも、おかしいな、こんなひどい音なのに、なんで僕は目を覚ましたんだ？」

「ひどい音だから寝られないって言ったじゃない」

未来ちゃんは言った。

「まあいい、とにかくもっと練習しろよ。僕は一度目を覚ますと、暫くはここに居ることになるんだから」

「えっ、ずっとここに居るの？」

「なんだ、嫌なのか？」

未来ちゃんは困ってしまった。

次の日から、未来ちゃんがその部屋に行くと、必ずその男の子の精霊はそこにいて、あれこれと文句をつけるのだった。

めずらしく、僕は常太郎の家にいる。

常太郎のパパが、僕をじーじの家から連れてきたもので、じーじが、一週間程ちーちゃん一家と旅行に出掛けるので、僕の居場所がなくなってしまうからだ。

ちーちゃんというのはじーじの二番目の娘で、近所に住んでいて、じーじの面倒をあれこれ看(み)ている人だ。

ちなみに僕は、ちーちゃんの作る食事で食い繋(つな)いでいる。

ということは、僕は一週間ママに面倒をみてもらわないといけないことになる。

ガーリックバターは嫌だ。

この家に来てから、僕はたいてい常太郎と過ごしている。もしくは、ぶらりと外に出掛けている。

常太郎といる時は、常太郎がいつも隣の部屋で寝ている時だ。常太郎が起きている時は、ママの監視の目が光っているからだ。

ママは我が儘だが、決して二歳の息子を放(ほ)ったらかすような真似(まね)はしない。

じゃあ、僕はいつも寝ている常太郎と過ごしているのかと

いうと、そうではない。

　常太郎が、ママにそう思い込ませているだけだ。常太郎には、そういう少し変わった能力がある。

「今日はもうすぐ、ママの演奏会があるから、出かけなくちゃいけないな」

　夕方近くに常太郎が言った。

「演奏会ってママの仕事かい？」

「まあ、アルバイト程度の稼ぎだろうけど」

「僕は留守番か…」

　僕は、仕方ないなと思った。

「いや、一緒に来ればいいよ」

　常太郎は言った。

「いいのかい？」

「君は、車の荷台にでも乗ってればいいよ。どうせ会社の軽トラックで行くんだろうから」

　見栄っ張りなママには不似合いなように思うが、どうもその辺りは気にしないようだ。

　夕方になって、僕達は、ママの運転するパパの経営する会

社の軽トラックに乗って出かけた。

当然、ママは僕が後ろの荷台に乗っていることは知らない。

僕達は、５００人程度入場できるなんとかという音楽ホールの楽屋に入った。

ママは、胡散臭(うさんくさ)そうに楽屋の中をうろついている僕を見た。いつになったら、僕を僕だと認識出来るようになるんだろう。

常太郎は、適当に置いてあるパイプ椅子にちょこんと座って、周りをきょろきょろ見ている。

「あら、常太郎君も来てたの？」

未来ちゃんが、常太郎に気づいて近寄ってきた。

常太郎はいつもの愛想笑いで彼女に応(こた)えた。

「今日はうちの主人が仕事で、看てもらえないのよ」

ママが言った。

「夜は、わりと現場に出ることがあるから」

「忙しいんですね」

ママは笑って

「そうね、儲からないけど」と答えた。

「佐多さん、今日はよろしく頼むよ」

奥村が近寄ってきて、未来ちゃんに声をかけた。

なにがよろしくなんだと思いながら、ママが言った。

「最近、未来ちゃんはとても上手になっていますから、大丈夫ですよ」

奥村は、わざとらしく目をくりくりさせて「そりゃあ結構だね、秋山さんがうまくリードあげるともっといいな」と言った。

「そうなんです、明奈さんよろしくお願いします」

未来ちゃんは、頼るような目でママを見た。

今日の演目は、バッハのコンチェルト（協奏曲）とビバルディのフォーシーズンズ（四季）だ。

比較的スタンダードな演目で、ママは学生の時に、バッハは全曲弾きこなしているので、得意ともいえる演目だ。

ちなみに、全曲やるというのは、よほどのパワーと根性がなければ出来ないことらしい。

そうこうしているうちにママの携帯が鳴った。

ママは携帯を取って話し始めた。どうやら、パパからのよ

うだ。

「えっ、そうなの？」

「それは困ったわね」

　ママの話声（はなしごえ）が聞こえてきた。なにやら込み入った様子で話しこんでいる。

　ママは浮かぬ顔で携帯を切ると、ばたばたと奥村の所へ行った。

「すみません、奥村さん、うちの主人が現場で足を骨折したらしいので、ちょっと行って来ていいですか？」

　ママが言った。

　奥村は不意を突かれて、ちいさくえっ、と言ってママを見た。

「えっ、骨を折ったの？そりゃたいへんだな」と言ったあとに、「それは困るよ、誰がピアノを弾くんだい？他には誰もいないんだよ」

　そう言って目を白黒させた。

「大丈夫ですよ、開演までには帰ってきますから。それに、いざとなれば奥村さんが弾けばいいじゃないですか、僕はピ

アノもやれるし、バッハなんかお手のもんだって、いつも言ってるじゃないですか」

　奥村は泣きそうな顔になった。

　ママは言い放つと、さっさと楽屋を飛び出すように出て行ってしまった。

「まったく、我が儘なんだからな…」

　奥村はぶつくさ口の中で呟いた。

「明奈さん、どうしたんですか？私に常太郎君をみててって言って出て行きましたけど」

　未来ちゃんが寄ってきて、奥村に訊いた。

　奥村が、なげやり気味に事のあらましを言うと、未来ちゃんも泣きそうな顔になった。

「ママ、出て行っちゃったよ」

　僕が常太郎に言った。

「そうだね、どうもパパが足の骨を折ったらしい」

　常太郎は淡々とした口調で言った。

「心配じゃないのかい？」

「僕が心配してどうにかなる訳じゃない。それにパパが自分

で電話してくるぐらいだから、そんなに心配はいらないんじゃないかな」

「冷静なんだな」

　コンサートの開演は夜の７時で、この季節にはちょうど涼しくなり始める時間だ。

　ママはなかなか帰ってこない。楽団のみんなはそれぞれ、所在無げに弦を調節したり、自分の眼鏡を磨いたり、不安そうに弦を弾(はじ)いたりしていた。

　なかでも、とり分け奥村は元気がない。きっと、ピアノを弾(ひ)く自信なんかないんだろう。

「ママ、戻ってきそうにないね」

　僕は、常太郎に言った。

「そうだね、多分かなり遅れるんじゃないかな」

「遅れたらどうするんだい？」

「それは僕には関係ないだろう」

「未来ちゃんが不安そうにしているよ」

　未来ちゃんは楽屋の隅っこに立って、楽屋の入り口の方ばかりを気にしている。

「またぞろ君の悪い癖だよ、僕になにかをさそうとしている」

「いやかい？」

「いやだね」

　常太郎はそっぽを向いた。

「ママが公演に穴を開けて、仕事がなくなったら、おまんまの食い上げだよ」

「ほとんど脅迫だな」

　そう言うと、常太郎は、気乗りのしない様子で楽屋を出て行った。

　常太郎が楽屋を出て行くのと入れ替わるようにして、ママが楽屋に入ってきた。

　楽屋の入り口にくぎ付けになっていた未来ちゃんの顔が、ぱっと明るくなった。

　他のみんなもほっとした様子で、奥村にいたっては、一瞬泣き出しそうな顔をした。

「秋山さん、よかった。間に合わなかったら、僕はどうしようかと思ったよ」

　多分、本音だろう。

常太郎には変わった能力があって、自分を誰かになりすませる事ができる、他人に自分の思ったように思い込ませることができる。そういう能力がある。

つまり、ここで現れたママは常太郎だ。

ママの登場で、なんとかコンサートは始まった。

最初の演目は、バッハのブランデンブルグコンチェルトだ。

ママがピアノをチェンバロ風に弾いて行く。最小人数の演奏だが、未来ちゃんの弾くバイオリンは心地よく、会場全体を撫でてゆく。

とても良い音色で、これまでの未来ちゃんとはまるで違っていて、奥村は、指揮棒を振りながら満足していた。

しかし、演奏が進むにつれ、奥村は、他(ほか)の皆(みんな)の表情が妙にぎこちないのに気がついた。

「佐多さん、とっても良かったよ」

幕間(まくあい)に楽屋で奥村が言った。

未来ちゃんはにっこりと笑った。こういう時の未来ちゃんはとても可愛らしい。

「でも、なんか違うんだよなあ」

「なんだか、いつもの君の演奏とは違うんだよ」

未来ちゃんは困った表情をした。

そもそも、いつも未来ちゃんに文句をつけている奥村の言葉とは思えない。

「何が違うって」

楽屋の隅っこで、僕はママの常太郎に訊いた。

「さあ分からないな、僕は未来ちゃんの演奏なんて、聴くのは初めてだからな」

「どこがいけないんでしょうか？」

未来ちゃんは、奥村におずおずと言った。

「いや、いけないことはないんだよ、ただなんか君らしくないと言おうか…」

今度は、奥村が困った顔をした。

未来ちゃんは、助けを求めるようにママの常太郎を見たが、常太郎は、どうしていいのかわからず何も言わない。

未来ちゃんはますます困ってしまった。

もうそろそろ後半のビバルディが始まろうとしている。今度は、未来ちゃんのソロが多い演目だ。適当にごまかす訳に

はいかない訳で、奥村の瀬戸際での余計な指摘は、ひどい混乱を招きそうだった。

幕間の休憩が終わり、ステージに出て行く時には、未来ちゃんの緊張は、どうしようもないものになっているように見えた。

ステージに立って観客に挨拶をし、奥村は皆を見回した。

未来ちゃんはうつむいている。

奥村は指揮棒を振りおろした。

音は出ない。

未来ちゃんは、しきりに弦を持つ右手をズボンにこすりつけている。

奥村は少し間を置いて、もう一度指揮棒を振りおろした。

今度は、ギッという弦をこする音がしてすぐに止んだ。

奥村は咳払いをして、指揮棒を立てて、天井を見上げ、細かく震わすようにそれを振った。

しばらく沈黙があった後、未来ちゃんが勢いよくバイオリンを弾き始めた。

それは、レッスン室でいつも弾いている時のようで、唐突

で力強く、ただ少しギコギコと妙な音をたてながら弾いて行く。

　ママの常太郎はあまり出番がないので、ピアノに向って上向き気味に座っている。

　ちょうどその頃、本物のママが楽屋に戻ってきた。

　未来ちゃんが勢いよくバイオリンを弾いている。ピアノは誰が弾いているのかよく見えなかった。

　もちろん、常太郎がママに見えなくさせているので、ママには誰が弾いているのか分からない。

　それよりも、ママは未来ちゃんの演奏に聴き入っていた。

　演奏会は、思ったより結構な拍手を浴びて終わった。

　ママは、真っ先に未来ちゃんのところへ行くと言った。

「すごいじゃないの、こんな演奏が出来るなんて」

「明奈さんと、皆さんのおかげでいい演奏ができました。自分ではよく分からないですけど」

　照れ臭そうに未来ちゃんが答えた。

「いい演奏だったわ」

「佐多さん、よかったよ、僕の言いたかったのはこれなんだよ、僕のアドバイスが効いたみたいだね」

　奥村が満面の笑顔で近寄ってきて言った。

「秋山さんもよかったよ」

　そう言うと、奥村は上機嫌で去って行った。

「どういうこと？」

　ママは未来ちゃんに聞いた。

「私のバッハの時の演奏が君らしくないって、奥村さんに言われたんです」

「なにを言ってるのかしら？君の演奏は、もっとどうにかならないのかって言ってる人よ」

　ママが憮然として言った。

「私、最近、ある人にアドバイスを受けてて、その人にもっと心地良い音色で弾けないかって言われるので、そうしようと思って弾いてたんですけど」

　未来ちゃんは、そこで一旦言葉を切った。

「奥村さんが、いつもの君とは違うっていうもんですから、私、なんだかよくわからなくなっちゃって」

「当然だわ」

「でも、よく考えてみたら、その人も、もっと心地良く弾けないかって言った後に、まあ、君は君の好きなように弾けばいいんだけどって言ってるんですよね」

「その人って？」

　そう聞かれて、未来ちゃんは少し戸惑った。

「学校のレッスン室にいる人で、ちょっと変わった人なんです」

　ママは、未来ちゃんは何を言ってるのかしら、と思った。

「金髪の少しでぶの男の子なんですけど」

「子供？」

　そう言った後、ママはすぐに笑った。

「あっ、行之介（ゆきのすけ）ね」

「行之介っていうんですか？あの人」

　未来ちゃんは大きく目を見張った。

「知らないわ、私が勝手にそう呼んでただけ」

「レッスン室に住んでて、ピアノの精霊だって言ってる子よ」

「そうなんです、そう言ってました」

「あの子、私が弾いてる時に、いつもピアノの端っこで寝てたのよ、デブのくせに蓋を開けたグランドの縁(へり)の上に乗っかって器用に寝てるのよ」

未来ちゃんは、笑顔をつくった。

「まだあそこに居たのね」

「ピアノ弾きの女の子って、明奈さんだったんですね」

感心したように未来ちゃんが言った。

「私のこと覚えててくれたのかしら」

ママは少し嬉しそうにした。

「話したのは、私で二人目だって言ってました」

「あ、そうなの？ちっとも知らなかったわ。てっきり、いつも居るもんだと思ってたから」

大雑把(おおざっぱ)なママらしい。

「で、それで未来ちゃんらしく弾いた訳？」

「思い切って弾いてみました、よくわからないですけど」

「よかったわ、とても」

ママは言った。

そう言った後に、ママは肝心なことを思い出した。

「あっ、常太郎は？」

　ママが振り返ると、常太郎は楽屋の隅で、パイプ椅子に座って眠り込んでいた。

　僕は、ママの運転する軽トラックの荷台に隠れるようにして乗り込んで、家に帰った。別に隠れなくても、ママはそんなことは気にもしないだろうけれども。

　ママは帰りながら、ふと、そういえば、ピアノは一体誰が弾いたのかしらと思ったが、それ以上考えることはしなかった。

　家に帰って、僕は奥の部屋で常太郎とくつろいでいた。

「演奏会がうまくいって、未来ちゃんは一安心だな」

　僕は常太郎に言った。

「そうだね、ママもくびになりそうもないし」

「彼女、学校はどうするのかな」

　僕は、未来ちゃんの心配をした。

「大丈夫じゃないのかな？ママが、未来ちゃんの奨学金の段取りをしてあげたみたいだから」

「そうなのかい？」

「でも、都会で暮らすには、それだけじゃ足りないだろう」

「それは、彼女がなんとかする話じゃないかな」

「それは、そうだね…」